晏子の御　解答

A　語句の意味と読み

(1) 馬車をあやつる人・御者。（ここでは晏子の馬車の御者）／「御す」＝馬や車をあやつる。題名「晏子の御」の「御」も同じ

(2) （すきまから）こっそりのぞき見る。／「窺ふ」と同じ意味の字。教科書によっては「窺」と書く

(3) 抱える・抱え持つ。（「大蓋を擁し」＝大きな車のかさを抱え持って）／「大蓋」は車の上に立てる大きなかさ（日よけ）。「かさをかざし」「かさの下に陣取って」などと訳す教科書もある。お使いの教科書に合わせること

(4) 駟馬＝一台の車を引く四頭の馬（四頭立ての馬車）／策＝むちを当てる（むちうって馬を走らせる）。／★名詞の「策」は「むち」。「策略」の「はかりごと」の意味ではない

(5) 得意げで誇らしげなさま。／現代仮名遣いでは「いきようよう」。今も「意気揚々と引き上げる」のように使う四字熟語

(6) 夫のもとを去ること＝離縁すること。／★単に「その場を立ち去る」ではない。妻が夫に別れを願い出ている

(7) （おごりを）おさえて、へりくだること。控えめにふるまうこと。／「抑」＝おさえる、「損」＝へらす。④の「意気揚揚として甚だ自得する」と反対の態度

B　句法

(8) 「故」＝理由・わけ。疑問の字＝「何」（「何故（なにゆゑ・なんのゆゑに）」で「なぜ」の意）。／本文には「何」は出てこない。夫の問いは「其の故を問ふ」と、地の文で短くまとめて書かれている

(9) 六尺→満→不（六尺に満たず）。「不」は助動詞「ず」にあたる字で、書き下し文では助動詞を平仮名で書くきまりだから。／★ここでは下に「に」が続くので、「ず」の連体形「ざる」になっている

(10) 「宰相をつとめる（宰相である）」という意味。宰相を表す「相」一字が、ここでは述語として使われている。／冒頭の「晏子斉の相と為り」（晏子為斉相）では「為」があったが、ここは「相」一字で同じ内容を表している

(11) 於（「于」「乎」も同じ働きをする）／ここでは置き字がなくても「諸侯に」と読んでいる。前半の「斉国に」も同じ

(12) 「それなのに・なんと」の意。八尺もの立派な体格なのに、人の召し使いの御者にすぎない、という意外さ・不満を表す。／★「そこで」と訳すと前後がつながらない。「かえって」「なんと」と訳す教科書もある

(13) ⑪＝「（自分では）十分だと思う」（〜と思う・〜とみなす）。⑮＝「（御者を推薦して）大夫にする」（〜にする）。／★同じ形でも意味がちがう。⑮は「以」の下に「之（＝御者）」が省かれている

(14) だから・こういうわけで。／★白文は「是以」。「ここをもつて」と読み、前に述べた内容（晏子と夫のちがい）を理由として受ける

C　主語・指す内容

(15) 晏子　／★御者の妻ではない。晏子が（御者の操る馬車で）外出したので、妻は夫の仕事ぶりを見ることができた

(16) 主語＝（晏子の）御者の妻／「其の夫」＝晏子の御者（妻の夫）。

(17) 御者の妻が、夫（晏子の御者）に願い出た。／直前の「既にして帰る」の主語は御者。帰ってきた夫に、妻が別れを願い出た

(18) 怪しみて＝不思議に思って。尋ねたのは、御者の態度が急にへりくだったものに変わった（⑬）のはなぜか、ということ。／「之」を「御者」と取り、「御者に尋ねた」と説明する教科書もある。続く「御実を以て対ふ」＝御者はありのままに答えた

D　口語訳

(19) その夫は宰相の御者として、大きな車のかさを抱え持ち、四頭立ての馬にむちを当て、意気揚々として、すっかり得意になっていた。

(20) 晏子様は背丈が六尺にも足りないのに、その身は斉の国の宰相であり、名声は諸侯の間に知れわたっています。

(21) 今、私があの方（晏子様）のお出かけを拝見しましたところ、お考えが深く、いつも自分からへりくだっていらっしゃる様子がありました。

(22) 今あなたは背丈が八尺もあるのに、なんと人の召し使いの御者となっています。それなのに、あなたの気持ちは、自分ではそれで十分だと思っています。私はこういうわけで、おいとまをいただきたいとお願いしているのです。

晏子の御　解答／現代語訳

E　内容・記述

(23) 高い地位にありながら、思慮深く、いつも謙虚にへりくだる人物。（三十字）　／⑧の高い地位・名声と、⑨のへりくだる態度を組み合わせる

(24) 晏子は小柄なのに宰相として名高く、しかも謙虚だが、夫は大柄なのに人の御者にすぎず、その身分に満足し得意になっているから。（六十字）　／★比べる点は、体格（六尺・八尺）、地位（宰相・人の御者）、心がまえ（へりくだる・満足して得意になる）の三つ。とくに⑪「自ら以て足れりと為す」が決め手

(25) 忠告を受けて思い上がりを自ら改め、問われて正直に答えた、過ちを素直に改められる人物だと認めたから。（四十九字）　／推薦の理由は本文に直接は書かれていない。⑬「自ら抑損す」と「御実を以て対ふ」を結びつけて考える

F　文学史・故事

(26) 『史記』／司馬遷／紀伝体の歴史書／管晏列伝　／前漢の歴史家。全百三十巻

(27) 男子を敬って呼ぶ語（「孔子」「孟子」の「子」と同じ）。名は嬰（晏嬰）。　／★子どもの意味ではない。妻の言葉の「子（し）」は「あなた」の意味で、これも相手を敬う言い方

(28) 管仲／管鮑の交わり　／列伝の名「管晏列伝」の「管」がこの人物、「晏」が晏子

【現代語訳（全文）】

晏子が斉の国の宰相であったとき、（ある日、馬車で）外出した。その御者の妻が、門のすきまから自分の夫（の様子）をのぞき見た。

その夫は宰相の御者として、大きな車のかさを抱え持ち、四頭立ての馬にむちを当て、意気揚々として、すっかり得意になっていた。

やがて（夫が家に）帰ってくると、その妻は離縁して出ていきたいと願い出た。夫がそのわけをたずねた。

妻は言った、「晏子様は背丈が六尺にも足りないのに、その身は斉の国の宰相であり、名声は諸侯の間に知れわたっています。今、私があの方のお出かけを拝見しましたところ、お考えが深く、いつも自分からへりくだっていらっしゃる様子がありました。今あなたは背丈が八尺もあるのに、なんと人の召し使いの御者となっています。それなのに、あなたの気持ちは、自分ではそれで十分だと思っています。私はこういうわけで、おいとまをいただきたいとお願いしているのです。」

その後、夫は自分から（おごりを）おさえて、へりくだるようになった。晏子は（その変わりように）不思議に思ってわけをたずねた。御者はありのままに答えた。晏子は（御者を）推薦して大夫にした。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる